

## 文明のかけはしとなるお茶

### 熊倉功夫

太古からつづく悠久なるお茶の歴史のなかに、ひとときわ輝かしい時代がある。今から約1350年前、8世紀のなかば、ちょうど唐代の文明が盛んな時代であった。文人の陸羽によって、最初の茶の書物『茶経』があらわされ、お茶は世界文明史のなかに、あざやかな第一歩をしるしたのである。

陸羽の生涯は、よくわからない。陸羽の住む湖州の長官に、唐代四大書家の一人として有名な顔真卿が赴任し、陸羽のために三癸亭を建てている。顔真卿が認めるほどに、陸羽の文才がすぐれていたことは確かである。

陸羽がことに愛したのはお茶であった。お茶は中国西南部の雲南の山奥から登場した不思議なのみものである。やがてお茶は現在の四川に達し、長江の流れにそって江南の地に根をおろした。陸羽が生をうけた8世紀には、北方の洛陽の都にも、新しいのみものとしてお茶は知られるようになった。

陸羽はその著『茶経』のなかで茶の歴史をひもとき、茶樹の性質、茶の製法、のみ方、さらに茶の道具にいたるまで、簡潔に、しかもあますところなく述べている。なかでも注目されるのは、茶が「儉」の徳をもつ人にふさわしい、と記していることである。儉とはつつしみ深い、ということ。いいかえれば、simpleでpureということであろう。陸羽は、お茶が単にのどのかわきをいやすばかりでなく、精神をたかめ、清らかにたもつのみものであることを、『茶経』のなかで説いている。

大唐の文明は周辺に、その一つである日本へもおおきな影響を与えた。日本からは、たびたび遣唐使が派遣されて、たくさんの文物が日本にもたらされた。そのなかにお茶もあったと思われる。

日本の記録にお茶の文字がはじめてあらわれるのは、『日本後紀』という記録の弘仁6年(815)4月22日の記事である。嵯峨天皇が近江(現在の滋賀県)の唐崎へ行幸した帰り、梵釈寺の前で輿をおりて詩をつくられた。その時、大僧都の永忠が茶を煎じて天皇に献じたという。永忠という僧侶は、ちょうど『TEA』の主人公と同じ時代に中国へ渡り、30年の長き日を過して帰ってきている。天皇に献じたお茶が、彼自身、中国からたずさえてきたお茶であったとするなら、固く餅のようにつきか

ためた団茶といわれるお茶であったにちがいない。これを碎き、粉にして湯に投じ、煎じてのんだのであろう。

中国への強いあこがれのなかで、お茶はにわかには日本人の心をとらえた。嵯峨天皇は国ぐにに茶の樹を植えさせ、年ごとに茶の貢納を命じた。また、天皇の住まう御所のなかにも茶園を設けさせたほどである。しかし、その後、中国へのあこがれが衰えると、喫茶習慣もやがて消えていった。

ふたたび日本でお茶がのまれるようになるのは嵯峨天皇の時代から約400年後、13世紀のことである。お茶を愛する二人の僧侶があらわれた。一人は、中国から新しい抹茶の製法とのみ方を伝えた栄西禅師であり、もう一人は、栄西から茶の種をもらって茶園をひらいた高山寺の明恵上人である。栄西禅師は中国で茶法を学び、『喫茶養生記』をあらわした。明恵上人は茶に関する著作はないが孤高の精神のなかで、もっとも茶を楽しみ愛した人である。明恵上人は、仏法を求めて中国からインドへ渡ろうとしたが、その夢は果たせなかった。もし渡唐の願いがかなっていたら、きっと陸羽のあとをたずねたことであろう。

お茶は中国をふるさととして、日本では茶の湯文化を大成させた。そして今、世界はお茶をかけはしとして、simpleにpureに、儉の精神をもって結ばれるのを待っている。